

テイル形式の意味と場面

－シナカッタ・シテイナイ・シナイの比較から－

木下泰臣*
(kinoomi@yahoo.co.jp)

目次

- 0 はじめに
 - 1 言語表現の研究と場面
 - 2 テイル形式の把握の仕方と場面
 - 3 表現の使い分け
 - 3.1 シナカッタとシテイナイ
 - 3.2 シナイとシテイナイ
 - 3.3 シナカッタ・シテイナイ・シナイのまとめ
 - 4 テイル形式の表現効果
 - 5 結論
 - 6 むすびにかえて
-

0. はじめに

否定発話は<肯定的想定>がその前提として存在する。肯定的想定には先行発話によって言語化された<明示的>なもの、言語化されていない<暗示的>なものがある。初級学習者には言語化されている方が扱いやすいと考えられるため、本稿ではひとまず肯定的想定が言語化されている場面で論を進める。

次の例で、Aが問題としているコトガラは「(Bが) 昼ごはんを食べた」である。

- (1) A: 昼ごはん、食べましたか？
 - B1: 食べませんでした。
 - B2: まだです。
 - B3: まだ食べていません。

* 熊本県立大学博士課程

Aの質問文に答えるにはいくつかの方法がある。Bが問題とされているコトガラを否定する場合、少なくともB1～B3の3通りが考えられる。B1のように質問文の述語を否定形にして答えることもできるし、B2のように副詞で答えることもできる。また、B3のように副詞と動詞を組み合わせて答えることもできる。文型積み上げ式の初級教科書であればB1,B2,B3の順番で学習するが、「食べていません」単独の用法も存在する。また、「食べないよ」とすることもできる。工藤真由美(1996)によれば、肯定的想定が先行発話において言語化されるとアスペクト対立・テンス対立が中和して発話される。したがって、アスペクト・テンスという文法カテゴリはこれらの使い分けを説明するのに適していない。本稿ではこれら否定形の応答表現の使い分けについて考察し、テイル形式を統一的に把握する概念に〈現象の解釈〉を提唱するものである。

本稿では次のような構成をとる。まず、1で言語表現の研究と場面の不可分性の認識を述べる。2ではテイル形式の把握の仕方について、先行研究に対する筆者の立場を述べる。3ではシナカッタ・シテイナイ・シナイの意味的特徴の背景となる文法的対立点を考える。4ではテイル形式の談話の中での表現効果を述べる。

1. 言語表現の研究と場面

「ご飯を食べている」「結婚している」などに代表されるテイル形式の意味・用法は多岐に渡り、日本語学習者が習得困難に挙げる学習項目の一つになっている。それはすなわち日本語を教える者の説明不足であることに他ならない。学習者が初級レベルであれば、テイル形式には「動作の継続」と「結果の持続」の意味があるといった説明で切り抜けられるかもしれない。しかし、中級になるとそれでは学習者の理解もおぼつかない。そこで、納得のいく説明を求めて文法書を読みあさったとしても、そこに書かれていることは「テイル形式には「継続」「結果」「習慣」「経験」などの意味がある」といった用法の列挙ばかりである。

用法とは、表出された文における意味上の分類である。書かれた文を分類して、分類上の名目として「継続」「結果」「習慣」「経験」などと呼んでいるに過ぎない。こういった後付け的な分類は、ある場面でどの言語形式を用いるかといった問題を解決するにはあまり役に立たない。これは例えば、テイル形式に「習慣」の用法があるからといって、習慣について述べる時は必ずテイル形式を用いる、というわけではないことから明らかである。

言語表現が意味を持つためには、どのようなディスコースであれ、コミュニケーションを目的としていると考える必要がある。会話文であれば話し手と聞き手のコミュニケーションであ

る。小説の地の文であっても書き手と読み手のコミュニケーションであると考えられよう。コミュニケーションを目的とした言語表現は、常に「場面」によって規定される。

場面とは、相手、環境、表現の内容、表現の目的など言語表現にかかわる要素を統合する概念である。日本語で何かを表現しようとするとき、まずいくつかの表現類型を意識し、その中から場面に合わせて一つを選択して表現する。もちろん、聞き手の側も場面に合わせた表現が用いられることを期待している。言語表現と場面との対応関係がその時代の社会慣習として適切でないときは違和感、ないしは抵抗感を抱くことになる。

文法とは一般的に単語を組み合わせて正しい文を作る規則であると言われている。脱場面化された文が文法書の中にしか存在し得ないとすれば、文法とは場面に対応し、単語を組み合わせて文を構築する規則であると認識できる。正しいか否かではなく、場面に対して適切であるか否かが重要な問題とされる。テイル形式を例にすれば、ある場面におけるテイル形式の使用には場面の要請があると考えるのである。

次の二つの発話はいずれも視覚情報によって知覚した事実を述べる文であるが、寺村秀夫(1984)によると(a)は適切であるが、(b)はそうではないとされる。

- (2) a. (道端で) あ、あそこに財布が落ちているよ。
b. (砂利道で) あ、あそこに石ころが落ちているよ。

これは、認知言語学でいうところの図(figure)と地(ground)の違いにある。前者の「財布が落ちている」は道端という環境においてたやすく図として解釈されるのに対して、後者の「石ころが落ちている」は砂利道という環境では図になりにくいいため、違和感を覚える。聞き手が後者の発話を意味ある情報として解釈しようとするれば、発話者にとって「石ころ」が特別なもので、普段はその「<特別な>石ころ」が砂利道に存在しないという前提を持っていると解釈される。「財布が落ちている」は図として焦点化されやすいため肯定形では適切であるが、否定形で発話されると理解に時間を要する。

- (2)' (道端で) あれ、財布が落ちていないよ。

「道端に財布が落ちていない」という現象は珍しいことではない。聞き手がこれを意味ある情報として解釈しようすると、発話者が道端に財布が落ちている(と期待している)という前提を持って発話したと推論・解釈することになる。

このように、言語表現が意味ある情報として理解されようとするれば必ず場面を踏まえた分析がもとめられる。したがって、場面分析を抜きにした言語表現の研究は成立し得ないのである。

2. テイル形式の把握の仕方と場面

テイル形式はアスペクト研究の中心的なテーマとして詳しく論じられてきた。特に、スル形、シタ形と対立させることによってアスペクト・テンスの観点で説明されてきた。工藤真由美(1995,1996)によると、スル・シタ・シテイルはアスペクト・テンス形式（形態論的形式）であるとされ、動的事象が時間の中にあらわれない否定形は「<肯定的想定>との関係の中で、間接的に時間指示性が与えられていく」として次のようなパラダイムで捉えている。

アスペクト テンス	完成相	継続相・パーフェクト相
非過去	シナイ	シテイナイ
過去	シナカット (シナイ)	シテイナカット (シテイナイ)

表 1：否定のアスペクト・テンス体系（工藤1996より）

しかし、アスペクト的な対立の程度は一樣ではなく、アスペクト的意味の対立の程度が薄い場合、すなわち非テイル形式でもテイル形式でもアスペクト的意味に差が生じない場合がある。例えば、「完成相過去という<肯定的想定>が、先行発話としてある場合には、シナカット・シナイ・シテイナイの3つの形式の使用が可能である(工藤1996:111)」場合である。

(3) A:昨日、勉強した？

B:いや、 a.しなかった。

b.しない。

c.していない。 (工藤1996より)

このような会話は、学生生活の中で試験前になるとよく耳にするものであり、(a)シナカット、(b)シナイ、(c)シテイナイはいずれもAの発話内容（肯定的想定）に否定で応答しているという点で共通している。しかし、日本語母語話者であれば、(a),(b),(c)が異なる発話意図のもとに発話されていることを直感的に察するであろう。勉強しようと思えばできたけれども他にやりたいことがあって勉強はしないと決断したという場合は(a)が選択され、私は勉強なんかしない人だという現在・過去・未来を問わない性質目当ての表現の場合は(b)が、

そして、昨日一日の振る舞いを思い起こし、勉強するにはしたけど十分にしたとは言えないという場合には(c)が選択されると思われる。

工藤は「<意志性>を明示する場合には、シナカットのみが可能である(p111)」、「<反駁性>が強い場合はシナイが使用される(p106)」と、シナカット、シナイの意味的特徴を示唆するが、意志性・反駁性がアスペクト的意味からどのようにして表出するのかについては言及していない。

アスペクト・テンス形式は、アスペクト・テンス的意味によって言語形式が選択されるとする立場である。工藤の言うように、否定形が「<肯定的想定>との関係の中で、間接的に時間指示性が与えられていく」のであれば、<肯定的想定>が先行発話で言語化されている(3)において、応答形式の時間指示性は一致する。すなわち、シナカット・シテイナイ・シナイはアスペクト・テンス形式（形態論的形式）でないことを意味し、これらの説明には時間的側面とは別の観点からの分析が求められる。

アスペクト・テンス形式と対立する概念に尾上圭介(2001)の叙述論的把握がある。尾上によると、スル形は事象をただ事象のタイプとして、素材的、前状況的に述定する形式であり、シタ形は「その事象は既に存在している」という基準点からの関係づけを含んで、事象を述定する形式とされる。本稿はひとまず尾上の説に従うことにする。

尾上は否定形の捉え方には直接言及していないが、否定形のシナイはスルを否定して述定する形式、シナカットはシタを否定して述定する形式と考えることができる。要するに、スルが「動詞の概念をそのまま表現する」のであるから、シナイは「動詞の概念の否定を、そのまま表現する」のである。シタが「事象の成立が時間軸上の特定の時点に認められ、その時点と発話時の関係を含めて表現する」のであるから、シナカットは「事象は成立しなかったものの、成立する機会が時間軸上の特定の時点において認められ、その時点と発話時との関係を含めて表現する」のである。スル・シナイが動詞の概念（またはその否定）をそのまま表現する形式であるのに対し、シタ、シナカットは時間軸上に事象成立のための特定の時点を設定する点で対立する。

テイル形式の把握の仕方については、柳沢浩哉(1995)、谷口秀治(1997)がある。柳沢は要約・引用・解説の用例からテイル形式の把握の仕方について、「報告性」の意味を仮定し、テイル形式を次のように規定している。

- (4) a.話し手は何らかの現象を観察している
 b.言表は観察結果の報告である
 c.言表は二次的情報である (柳沢1995より)

柳沢は(b)の「観察結果の報告」は五感によって知覚された情報に解釈・要約・選択といった何らかの知的操作が加えられたものであるとし、テイル形式は何らかの知的加工を

経た二次的情報であるとしている。また、テイル形式の第一の機能にアスペクトを認めており、次のように述べる。

- (5) 同一の意味がアスペクト的意味と報告性の二つの意味として顕在化する
(柳沢1995:214)

つまり、テイル形式は知覚情報に知的加工が加えられたものであり、そのバリエーションとしてアスペクト的意味と報告性が併存するとしているのである。柳沢の報告性はテイル形式の全ての用法に当てはまる概念として一定の説得力を持つと思われるが、深層における同一の意味の規定と、そこから表層の二つの意味が顕在化するメカニズムについては言及されていないため、なぜテイル形式という形態をとって発話されるのかという問題に対する解答にはならない。

報告性が抱える問題に対する一つの答えとして、山本雅子(2005)の「今ココで認識する」というグラウンディング形式がある。グラウンドとは山本によれば「発話という事象に関わる要素を統合的に指す概念(p93)」とあり、本稿の場面の概念と一致する。グラウンディングによる分析は尾上にも見られるが、山本は、テイル形式の機能を「話者が知覚を手掛かりに、グラウンド内に位置する事象の成立を自己の今ココで認識するというもの」であるとして、次のように述べる。

- (6) (テイル形式のスキーマが意味しているのは) 話者が事象の成立を認識するという話者の認識態度であり、事象に関与する何かではないということである。つまり、話者は自己の今ココに事象を位置づけて「事象の成立」を認識するが、その成立は事象が現実にも成立しているかどうかではなく、言語主体がその事象を成立しているとして解釈することを意味しているのである。現実世界の事実の問題ではなく、解釈の問題である。(p94)

つまり、山本によると、テイル形式は事象が現実にも成立しているかどうかではなく、事象が成立したとく解釈>するときに用いられるとされるのである。

柳沢、山本の論を参考にすれば、テイル形式の産出のメカニズムは (7)のようにまとめられる。

- (7) a.話し手は何らかの現象を感覚器によって知覚し、認知している
b.話し手は自らの都合に合わせて知覚情報を<解釈>する
c.テイルは解釈の肯定、テイナイは解釈の否定を示している

テイル形式の性質として指摘される客観性・観察性は(a)の「現象を知覚し、認知する」という行為によって表出する。そして、テイル形式は知覚情報に話し手の解釈が加えられたいわば二次的情報であり(b)、その否定形は<解釈>という行為を否定しているのであ

る(c)。(7c)の<解釈>を否定するというのは換言すれば「私は認めない」という認識態度である。

(8) (稽古の一部始終を見て)

「そこまでッ！」

二人の勝負に見切りをつけた唄が、声を張り上げた。

「何だよ！まだ、終わってないッ！」

「ふん。どこから見てもお前の負けですけな」

「負けてないッ！」

と叫んだけれど、唄の言う通り、勝敗は、一目瞭然である。

(空蟬)

(9) おまえは、なんでそうやって相手の事情をのむの？だから女房に逃げられるんだよ。」

「女房のことは、関係ないでしょ？」

「あるよ。女房の事情をのんだから、逃げられる自分に甘んじたんだよ。」

(ちょっと考えて、理解し) 「いや、甘んじてないよ。」

(夏ホテル)

(8)は、稽古で打ち負かされた今の状況を「終わった」、「負けた」とは解釈しないという認識態度である。

(9)でも、当時の自分を思い返し、女房に逃げられはしたものの、そんな自分に甘んじたのではないという話し手の気持ちを感じられる。

このように、テイル形式の否定形には、知覚した情報に対して事象が成立したとは認めない、という話し手の認識態度を表す場合がある。もう少し例を見てみよう。

(10) それでもボクはやってない

(映画のタイトル)

(11) 「どうしてそういう言い方するの？」

「そういう言い方って？」

「大げさな、バカみたい。私白ける。」

「白けてないよ、おまえは。ただ悲しんでいるんだよ、何を？自分の人生をさ。」

(夏ホテル)

このようなテイル形式の否定形にも、「私は認めない」という話し手の認識態度が読み取れる。

(10)は、痴漢冤罪事件の裁判を扱った映画のタイトルで用いられたものである。周りが何と言おうと、どのように状況証拠が並べられようと、たとえ有罪判決が下されようと、「痴漢をした」という事象の成立を認めないという被告人の認識態度が表現されている。

(11)は話し手がこれまで知覚した「おまえ」に関わる情報を統合し「白けた」とは解釈しないという認識態度である。

以上、本節ではテイル形式の把握の仕方について、研究諸説に対する筆者の考えを述べた。アスペクト・テンス体系はテイル形式の一部の用法を説明しているに過ぎず、テイル形式の全体を把握する概念とは認識し得ない。テイル形式は、情報の知覚から産出までの過程において知覚情報に話し手の〈解釈〉という知的加工を経た言わば二次的情報であり、その否定形は「私は認めない」という認識態度であると考えられる。

3. 表現の使い分け

本節ではテイナイを、シナカッタ・シナイと比較し、意味的特徴を生み出す文法的な対立を考える。

3-1. シナカッタとシテイナイ

シナカッタとシテイナイを比較する。シナカッタは〈過去の特定時〉における事象の成立を否定しているが、シテイナイはそうではない点で対立する。

- (12) A:昨日、ここにあったお饅頭、食べた？
B1:食べなかったよ。
B2:食べていないよ。（饅頭があったの？）

B1は「食べなかった」のあとに「饅頭があったの？」と問い返すことはできない。ゆえにシナカッタには「饅頭の存在を知覚した瞬間〈時間軸上の特定の時点〉」が必須であることが分かる。また、「饅頭を食べる」という〈肯定的想定〉がBの意志で左右できるため、〈意志性〉が表出する。つまり、B1は時間軸上の特定の時点（饅頭を目視した時点）に「饅頭を食べる」という事象成立の機会があったことを認めながらも、Bの意志によって「食べない」という選択をおこなった、という意味になる。

B2は「食べていない」のあとに「饅頭があったの？」と問い返すことができ、「饅頭があった」という事実を知らなかった場合にも使われる。つまり、〈事象成立のための特定の時点〉を必要とせず、単純に肯定的想定のみを否定するのである。そのため、事象成立の可能性が残っていることを示す「まだ」や、〈時間軸上の特定の時点〉を想定しない「饅頭があったの？」という事実そのものを問い返す表現と共起できる。この分析は瞬間動詞でも変わらない。

- (13) A:あの時、結局、彼とは結婚したの？
B1:ううん、しなかった。
B2:ううん、していない。

B1は事象成立のための特定の時点の存在（結婚する機会）を認めながらも何か事情があって結婚しないという選択をおこなったという意味になる。

B2は事象成立のための特定の時点は問わないため、単純に事象成立の否定のみを述べるにとどまる。

次の例は学生同士の会話である。Bは事象の観察者であり、「授業がp70まで終わる」という事象成立にBの意志は関与しない。

(14) A: 昨日の授業、p70まで終わった？

B1: 終わらなかったよ。

B2: 終わってないよ。

B1は「授業がp70まで終わる」という事象成立のための特定の時点を認め（授業に参加した時点ではp70まで終わる可能性があったことを認め）つつ、事象が成立しなかったことを意味する。事象成立にBの意志は関与しないため、「わざとP70まで終わらなかった」という<意志性>は含意しない。

B2は「昨日の授業の様子」を回想し、その情報を事象が成立するほどではない（p70に至らなかった）と解釈した表現である。

3-2. シナイとシテイナイ

ここではシナイとシテイナイを比較する。シナイとシテイナイは事象成立の機会を時間軸上の特定の時点に必要としない点で共通する。対立する点はシナイが動詞の概念の否定を、そのまま表現するのに対し、シテイナイは現象を知覚し、その情報を動詞の概念が成立するには至らないと解釈して述べる点である。<現象の解釈>を必要とする場面ではシテイナイが使われ、<現象の解釈>が必要とされない場面ではシナイが使われる。次の例は、用事があって離れた所に滞在している知人が電話で週末の天気を聞く場面である。(15)は日本国内での通話、(16)は日本とオーストラリア間の国際電話で考えられたい。

(15) (電話で) A: そっち、週末、雨降った？

B: 降ってないよ。

(16) (電話で) A: クリスマス、雪降った？

B: 降らないよ。こっちは夏だもん。

(15)では、BはAの質問に対し、週末の天気を回想し、情報を解釈して応答しており、<観察性・報告性>が認められる。シナイに置き換えると「天気の回想」を必要とせず、「降るわけがない」といった<反駁性>が表出する。

(16)では、日本のクリスマスが冬であるのに対し、南半球のオーストラリアは夏である。Bが居るオーストラリアは夏真っ盛りで、雪が降るとは考えられない。この場合、現象の解

釈を必要とせず、シナイで応答される。(16)のように、「天気の回想」を必要としない場面ではシナイが発話されやすい。また、

- (17) A:あの時、結局、彼とは結婚したの？
B:しないよ。あんな男！

のように、Bが強い否定の気持ちを持って発話する場面では必ずシナイで応答される。ここでは「私はあんな男とは結婚しない人だ」という性質を述べる表現となり、過去・現在・未来を問わず、あんな男と結婚の可能性はないと＜反駁性＞が表出する。(17)の発話をシナカットやシテイナイに置き換えることはできない。

3-3. シナカット・シテイナイ・シナイのまとめ

シナカット・シテイナイ・シナイの意味的特徴を生み出す文法的な対立点が観察された。次の例は学生同士の会話で考えてもらいたい。

- (18) A:昨日、勉強した？
B:いや、(a)しなかったよ。
(b)しないよ。
(c)していないよ。

上述したように、シナカットには「やろうと思えばできたけれども他にやりたいことがあって勉強しないという決断をした」という＜意志性＞が表出する。これは、時間軸上における特定の時点において「やろうと思えばできた」という＜事象成立のための特定の時点＞が存在することによる。勉強するという肯定的想定成立にBの意志が関与し得るため、「勉強する機会はあったがしなかった」という意味になり、＜意志性＞が表出するのである。シナイは動詞の概念の否定をそのまま述べる形式である。過去・現在・未来の区別無く「私は勉強しない人だ」という性質目当ての文になり、「昨日に限らずいつも」という＜反駁性＞が表出する。Aの質問の応答としては「だから昨日も勉強していない」という推論によって理解される。

シテイナイは＜現象の解釈＞である。Aの発問から昨日一日の様子を思い返し、「勉強した」という肯定的想定の解釈を否定するという過程を経るため、＜観察性・報告性＞が表出する。

これまで見てきたシナカット・シテイナイ・シナイの文法的対立を表2にまとめる。縦に否定の言語形式、横に言語形式の談話的機能と意味をとる。「必要」はその言語形式に必須であることを意味し、「×」はその言語形式が使えないことを意味する。「－」はその言語形式の使用に制限がないことを意味する。

	特定の 時点	現象の 解釈	事象成立の 可能性	表出する意味
シナカッタ	必要	×	可能性なし	<意志性>
シテイナイ		必要		<観察性>
シナイ		×		<反駁性>
マダ			可能性あり	

表 2：否定形式の文法的使い分け分類表

シナカッタは<時間軸上の特定時>を必要とする。事象成立の機会に事象が成立しなかったことを述べる言語形式であり、事象の不成立そのものが焦点となる。事象の成立に話者の意志が関与し得る 1 人称意志動詞の場合には<意志性>が表出する。また、事象成立の可能性が残っていないことを意味するため、事象成立の可能性を必要とする「まだ」とは共起しない。

シテイナイは<現象の解釈>である。知覚した情報を<肯定的想定>が成立するには十分でないと解釈して表現するため、時間軸上において事象の不成立そのものは焦点とされない。「まだ」が共起すると事象成立の可能性が残されている意味になり「これからやります」などが続く。「昨日」など過去の特定の時点に焦点が置かれているときは「まだ」を伴わずに単独で用いられる。

シナイは<時間軸上の特定時>も<現象の解釈>も必要としない性質目当ての表現である。動詞の概念の否定をそのまま表現し、強い<反駁性>が表出する。

4. テイル形式の表現効果

日本語教育の観点で言うと、初級段階で導入されるシナカッタとシテイナイの使い分けはコミュニケーション上、重要なものである。適切に使い分けるためにはテイル形式が談話の中でどのような表現効果を持つのかを把握しておかねばならない。柳沢はテイル形式の表現効果を「テイル形では行為そのものではなく、その行為から導かれる結果に焦点が置かれる(柳沢1995)」と一般化している。本稿が扱うテイル形式の否定形は言表が示す「行為」の存在が義務的でないため、次のように改められる。

(19) テイル形式は言表そのものではなく、言表から導かれる結果に焦点が置かれる

談話の中では、テイル形式の使用により言表から導かれる結果に発話の焦点が置かれる。(20)の場合は、「自分のことしか考えてない」から導かれる「あんたとはサクライのことを話したくない」に発話の焦点が置かれる。(21)の場合は、「うまく行ってない様でね」か

ら導かれる結論「藤沢が辞めたいという話」に焦点が置かれる。

(20) あんたとはサクライのことを話したくない、あんたは本当に凶々しいと思うな、あんたは、どうしても聞きたいって言うけど、そりゃあんたの都合だ、いいかい、オレの方にも都合はあるんだよ、要するにあんたは自分のことしか考えてないわけじゃないか (白鳥)

(21) 話がずれちゃったけど、セクハラじゃないとすると何なの？
「そうそう、気になってるのはその藤沢が辞めたいという話が。そうですね、6月の始め頃かな、どうも課長の梶山とうまく行ってない様でね。」
「何故なの」 (プレSE奔走す)

(20)では、話し手はサクライと知人であり、サクライが女(あんた)に傷つけられたことを知っている。引用箇所は話し手のもとに女が訪ねてきてサクライについてしつこく聞いている場面で、女の自分本位な態度に対する発話である。話し手は女の言動を視覚・聴覚情報として知覚し、「自分のことしか考えてない」と要約している。

(21)は、話し手は事前に藤沢から「割り振りの仕事量が多い、難易度が高い」といった相談を受けている。知覚情報(ここでは藤沢から聞いた具体的な相談内容)を「課長とうまくいっていない」と要約しているのである。

要約とは、文章を簡潔な言葉に置き換える知的加工である。つまり、要約は複数の知覚情報を一つの動詞の概念に<解釈>すると認識され、<解釈>の一形態に位置づけられる。次のような例も要約に含めてよい。

(22) 大学授業の要領は、究極的には単位をとることを中心に回っている。だから単位をとるために、要領をかましていけないと損した気分になる。学歴さえあれば、と考える学生にとっては、卒業さえできればいいのだから、デメリットなど何もないし、何も問題はないのかもしれない。だが、何の目的意識もなく、ただ要領よさだけに目がくらむと、要領よくなることだけが目的になり、なんにも身に付かなくなるおそれがでてくる。一つの事を突っ込んでやっていないから、どれも中途半端で曖昧なまま終わってしまう。
(大学授業の生態誌)

書き手は、教室の後ろに座って講義を聴かない、自分でノートを取らず試験前にノートを借り、といった行為を「要領をかます」と要約している。この段落では「要領をかます」ことの一側面が「なんにも身に付かない」ことにつながることを説明し、「一つの事を突っ込んでやっていない」と言い換えている。換言すれば、テイル形式は「要領をかます」ライフスタイルを「一つの事を突っ込んでやった」とは認めないという書き手の認識態度である。

このように、<現象の解釈>は談話の中で要約という側面を持つことがある。その表現効果は(22)で言えば、「一つの事を突っ込んでやってない」ことから導かれる「どれも中途

半端で曖昧なまま終わってしまう」に焦点を置くことである。テイル形式はこの段落で書き手がかもっとも言いたいことの根拠を示し、解説性を帯びるのである。

次の例は〈現象の解釈〉が要約的側面を持たない例である。

- (23) でも、ミクちゃん、どうすんの。結構大変なんじゃないの。」
 「関係無いよ、直さないもん」
 松本はえっ、と言い、続いて三人は声を上げて笑った。
 「いいの？本部長、結構熱心に指摘してたよ」
 「いいよ。どうせ細かくは覚えてないだろうし。そのままだって判んないに決まってるよ。それに、言い回しを少しは直すから自分の指摘が効いたと思うだろうさ」（プレSE奔走す）

この場合、話し手の関心は「本部長が覚えてない」ことそのものにあるのではなく、「覚えてない」は「直さなくていいよ」と判断する根拠を解説していると言える。次の例も同様である。

- (24) 授業回数はそれぞれ十二回で、このうち七回以上欠席し、試験の受験資格を失った学生が第五限の授業で三名いる。これらの学生は今回の調査の対象となった二回分の授業にも出席していない。
 （大学授業の生態誌）

この場合も、調査の対象となった授業は過去の出来事であるため、学生の出席の有無のみを焦点とすれば「出席しなかった」に置き換えることができよう。しかし、ここで書き手の関心は学生の出席の有無にではなく、学生が出席しなかったことによって引き起こされた事態にある。つまり、書き手はテイル形式を用いることによって出席の有無には焦点をおかず、そこから導かれる結論の「調査対象者数」に焦点を置いているのである。また、

- (25) 報道用資料において積算の内容が明らかになっていないなど料金決定、改定の内容、必要性等について国民の理解を得るうえでの情報公開が必ずしも十分とはいえない。
 （行政評価の視点）

のような場合も、テイル形式は、報道用資料の内容を情報として知覚し、それを積算の内容が明らかにされているとは認めない、とする書き手の認識態度である。話の焦点は、「積算の内容が明らかになっていない」ことから導かれた結果である「情報公開が必ずしも十分とはいえない」に置かれ、テイル形式は解説的な意味合いを持つ。

以上、ここではテイル形式の表現効果について考察した。本節の内容を踏まえると、〈現象の解釈〉は次のように修正される。

- (26) a.話し手は何らかの現象を感覚器によって知覚し、認知している
 b.話し手は自らの都合に合わせて知覚情報を〈解釈〉する
 c.テイルは解釈の肯定、テイナイは解釈の否定を示している
 d.発話の焦点は言表そのものではなく、言表から導かれる結論に置かれる

5. 結論

アスペクト・テンス体系は意味的にも用法的にも肯定形と否定形が対応しておらず、シナカット・シテイナイの使い分けを説明するのに適していない。日本語教育で求められる「文法」とは「ある場面でなぜその言語形式が発話されるのか」または「ある場面で、ある言語形式はどのような意味であるか」を説明することである。本稿の内容であれば、肯定的想定が完成相として先行発話で言語化された肯否質問に否定で応答する場面で、なぜシナカットが発話されるのか、あるいはなぜシテイナイが発話されるのか、それはどのような原理に基づいて使い分けされているのかについて説明することである。したがって、言語表現と場面は不可分であり、脱場面化・脱文脈化された言語表現の研究は成立し得ない。

本稿では肯否質問に過去否定で答える場面ではアスペクト・テンス以外の要因で否定の応答形式が使い分けられていることを明らかにした。テイル形式の機能は「事象を知覚し、その情報を動詞の概念で解釈する」という認識態度を反映するものであり、その表現効果は「言表そのものから、言表から導かれる結果に焦点を移す」ことである。日本語教育の初級文法の学習項目で言うと、シナカットは<過去の特定時における事象成立の否定>であり、1人称意志動詞では話者が意志を持って動作しなかったという意味になる。シテイナイは肯定的想定の成立には至らないという<現象の解釈>である。

6. むすびにかえて

従来 of 文法研究では産出された文を後付け的に分類することに最大の注意が向けられてきた。研究のパラダイムを転換させ、運用のメカニズムに光を当てることができれば、これまでの文の構造重視、文型重視の教授法を超え、運用力が養われる言語教育が可能になるだろう。本稿ではそのような認識に立ち、場面と言語形式の不可分性の認識のもとにテイル形式の否定形の分析を進めた。

日本語のコミュニケーションでは肯否質問が多用される。シタ形で問われた肯否質問に否定で答える場合、シテイマセンは過去、現在を問わず使われること、シマセンデシタは過去に限定され、1人称の意志動詞では<意志性>が表出されること、両者には使い分けが存在することを押さえておきたい。

最後に、本稿では詳しく取り上げられなかったが、日本語教師がテイル形式を導入する際、このような観点からテイル形式を把握し、例文を提示していくことは日本語学習者がテイル形式を習得していく上で有効な手段となり得ると考える。

【参考文献】

- [1] 内田安伊子(2003)“肯否質問に対する省略応答”「講座日本語教育」第39分冊pp42-60 早稲田大学日本語教育センター
- [2] 尾上圭介(2001)「スル・シタ・シテイルの叙法論的把握」『文法と意味Ⅰ』pp391-416くろしお出版
- [3] 木下泰臣(2007)“否定の意志かアスペクトか—過去質問に完了で答える肯否質問—”「韓国日本文化学会秋季大会予稿集」韓国日本文化学会
- [4] 木下泰臣・馬場良二(2008)“過去否定について考える—「食べませんでした」と「食べていません」—”日本語教育学会沖縄研究集会発表原稿
- [5] 工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト』ひつじ書房
- [6] 工藤真由美(1996)「否定のアスペクト・テンス体系とディスコース」『ことばの科学7』pp81-136むぎ書房
- [7] 谷口秀治(1997)“テイル形に関するムード的側面の考察”「日本語教育」92号pp143-152 日本語教育学会
- [8] 寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』pp125-144くろしお出版
- [9] 野田尚史 編(2005)『コミュニケーションのための日本語文法』くろしお出版
- [10] 松岡弘 監修(2000)『日本語文法ハンドブック』pp40-71 スリーエーネットワーク
- [11] 柳沢浩哉(1995)“テイル形の非アスペクト的意味(2)—報告性の射程—”「人文科教育研究」Vol.22 pp207-214 筑波大学
- [12] 山本雅子(2005)“テイル形式の認知的意味”「言語と文化」No.13 pp89-101愛知大学語学教育研究室
- [13] 山梨正明(2000)『認知言語学原理』pp18-48 くろしお出版

用例出典

「空蟬」森山真琴/「行政評価の視点」行政評価研究会/「白鳥」村上竜/「大学授業の生態誌」島田博司/「夏ホテル」岩松了/「プレSE奔走す」広井徹

要 旨

テイル形式はアスペクト研究の中で詳しく論じられてきた。特に工藤真由美のアスペクト形式（形態論的形式）の概念は談話的機能までも視野に入れた重要なものである。しかし、否定形はアスペクト・テンス対立が中和されて使われるため、アスペクト・テンス形式の特徴が分かりにくくなっている。

本稿では工藤に対する有効な批判である柳沢・山本を参考にしながら、テイル形式はく現象の解釈のマークであることを主張した。このように理解することで、シナカット・シテイナイ・シナイの使い分けが説明できた。本稿の内容は日本語学習者に対する文法教育という観点からの基礎研究としても意義を持つものである。

キーワード：テイル形式、否定形、肯定質問の否定応答、シナカット、シテイナイ

투 고 : 2008. 11. 30
1차 심사 : 2008. 12. 13
2차 심사 : 2008. 12. 27